
MI ッ K I ー

れもん@ねーど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M I ッ K I ー

【Nコード】

N 1 5 7 5 Z

【作者名】

れもん@ねーど

【あらすじ】

平凡な学校生活。この出会いが私たちを変えた。

出会い

こんな退屈な毎日がずっと続くと思ってたんだ。

高校一年生もうすぐ終わる。勉強も運動も人並み。目立つ方ではなく、ぼっちになっていることもない。要するに、平凡な女の子として生きてきた。

『幹南さんへ』

下駄箱を開けたら（ウチの高校にもパカパカきたー！）、紙片が入ってた。―正確に言くと、手紙が入ってた。

まさかの漫画パターン？よく見るとノートの切れ端…。彼氏いない歴16年、幹南又柚、舞い上がりました！…。

えゝ、気を取り直しまして…。

『幹南さんへ 放課後、物理実験室で待ってます。』

…や、やっぱりこれって、もしやのあれですか？16歳にしてやつと…やつと私にも春が来たあ！

―思い出しながら廊下を歩き、ドアを開け…。やっぱり現実ってそう上手くできてないよね。

「あ…あのお。」

「あら、幹南さん、遅いから来ないかと思ったわ。来てくれたのね。」

何故か私の名前を知っていて…、来てくれたって言った？

「あのお…。」

「あ、私、2Cの三月美喜って言います！よろしく。」

「よ、よろしく願いします…？」

ああ、握手とかしちやってるよ。なんかすごい笑顔だよ。何この人ー！

「えっと、ここに呼んだのは他でもないわ。私あなたに惚れたの。」

…この人何言ってるだろう。

「あの、頭とか打ちました？」

「あら、毒舌なのね。そういうのも良いわ。あとねー私は本気よ？」

—こういうわけで私たちの交際（…）は始まった。

新たな出会い

「又柚―？ご飯食ーべよ！」

すでに日課と化してしまった昼。『私はOKした覚えはない！』
ほぼ強制的に屋上へ連れていかれる…。そのあとから少年も着いてくる。

高校入学してから二度目の春。私は無事進級し、クラスの仲間と別れんのやだな〜とか次のクラスでうまくやってけるかな〜とかぼんやり考えてたとき、

「さーゆー！」

ああ、今日も朝から…

「うわっ、危ない！」

「うげっ」

華の女子高校生…なんという言葉を使ってしまったんだあ！

それより…

「痛ーい！」

「マジでごめん。君大丈夫？怪れない？」

「又柚ごめんねえ。つつい興奮しちゃってねえ。そしたらコイツがハンドル操作を…」

「完璧お前のせいだろ！もっと真剣に謝れ！」

「大丈夫よ、又柚はたくましいから。ね、又柚？」

『ね、又柚？』じゃないだろ！急に自転車がぶつかってきたと思ったら、美喜先輩と見知らぬ少年…って

「先輩、彼氏いたんですか！」

「えー、何でそうなる。てか美喜って呼んでって言うてるでしょ？」

「じゃ、その人誰ですか。先輩と男子が普通に話してるとこ初めて見たんですけど。」

「え、スルー？彼女に対しての愛情が…」

「コイツは姉貴。俺は同じ学年の三月啞遊都。よろしく。」

そういうことね

姉貴…？

「あつ、先輩の弟さんですか。」

納得。そういえば目元とか似てる気がしなくもない。

「今年からこっちに転入。それでこいつが調子乗って俺の自転車に…」

「それが『お姉様』に聞く口？たまには『姉貴、乗ってけよ。』とか言ってくれたって良いじゃない。」

「死んでも言わないね。じゃ、又柚行こうか。」

「こら！私の又柚を取らないで！又柚、お見送りしてよね。」

いきなり呼び捨て！？しかも何この板挟み！

—こんな感じに私たちは出会った。

この出会いで私の勉強詰めの退屈な毎日が輝き出したんだ。

屋上

「…そへへさあ、あゆひっははおほはへひゃって」

やっと我に返ると異国の言葉を話している人がいる。

「姉貴、汚ねえから食べ終わってからしゃべろ。しかも何言ってるんだかマジわかんない。」

「うふはひはねえ。あんははだはっへほ！あたひは又柚ほはなひへのよ。（ドヤ）」

何故にそこでドヤ顔？必要な部分か？とゆうか、私思い出に浸ってて全く聞いてなか…

「又柚ずつとぼーつとして聞いてねえよ。」

そ…その通り。

「えー。又柚、それは酷いわ。人が話してるときは目を見て話すってお母さんに教わらなかった？」

「姉貴も又柚の目なんきや見てねえだろ。」

「又柚の顔見てたらもうとろけて見れないわ。（ウインク）」

「あ、又柚、もうすぐ夏休みだよな。」

「そうだね。高2の夏しかもう遊べないからじゃんじゃん遊びたいな。」

「ちょっと、スルー？スルー？酷いわ！あんまりだわ！…そうだわ、高校最後の夏。いっぱい遊びましょう♪」

切り替え早っ！てか先輩進学しないのか？大丈夫なのか？

「大丈夫だよ。姉貴勉強は出来るから。」

「ちょっと唾遊都、だけって何よ。だけって！もっと私良いところいっぱいあるわよ。かわいいとか美人とか…」

「はいはいはい。受験生はほつといて、どこ行こうか、又柚。」

「あら、デートなんか許さないわよ。又柚は私のものなんだから。」

「

兄弟の共通点その一。人の考えは丸つきり無視する、つと。はあ。

天才

「はい、じゃ、成績表返すよー。」

学生ならわかるだろう。返さなくて良いと切実に思う。このまま帰りたい…。

「…松木。もっと頑張れ。えー三月。その調子でな？」

「あ…はい。」

私は正直しゃべるのが苦手。人の気持ちを考えるってのが出来ないんだよね。

13位か…。良いんだか、悪いんだか…。

「又柚ー。どーだった？（ニカッ）」

なんだ？その満面の笑み…。身の危険を察知し、睨んでみる。そんな様子も気にせず、私の前に紙をやる。

「…。唾遊都？これ何？」

「何って見ての通り成績表。」

オール5。高校でこれは…。

「唾遊都、お前まさか天才か？」

微笑んだまま…。

私の通ってる学校は県立一の学校。…あり得ない。

まさか兄弟そろって天才とか？

先輩の遊びっぷりは…そういうことか！

全く嫌なヤツらに絡まれてしまった…。

「又柚？暗い顔してどした？」

お前らのせいだ！本人は気づかないもんだよね。全く…。

m i k i

「美喜ー。これ教えてー。」

「これはね…」

いつもいつも変わらない日々。学校行って家帰って。単調に毎日
は過ぎてった。

昔から勉強もスポーツもできる方だった。いつもみんなに頼りに
されてたし、楽しく生活していた。

けど、みんな私と勉強の話しかない。テレビなんかつまらない
から見てないし、恋なんかしたことないし、したいとも思わない。
部活も入っていない。

私のまわりにはいつも友達がいた。

でも、私はいつも一人だった。

いつも孤立してたんだ。この才能のせいで。

純粹だった私はいつも周りに人がいて幸せ者だと思ってた。

私には親がない。弟と一緒に孤児院に預けられた。普通じゃないから。

親は病気で亡くなった、と言われてきた。でも、ある日親からの伝言を聞かされてから、私は人を信じられなくなった。

夏休み初日

今日も普通な日になる…はずだった。

夏休みも始まり、ゆったりと過ごそうと思ってた。

「又柚、そんな成績で大丈夫なの？」

…ですよね。

目標は高く！

ということで、私は医者夢を今の今まで諦めていない。

こんな成績じゃダメなのはわかってる。でも精一杯やってるのに、いつも空回り。

そんな悩みを抱えたままなんの解決策もなく夏休み突入の一日目の朝。

私は着信音で目覚めた。

とっても、とっても嫌な予感…。

予想通り、画面に『美喜先輩』の文字。

はあ…。やっぱり私の夏休みは普通にならないんだな。

「もしもし…。」

「おはよー！起こしちゃってゴメンねえ。」

謝る気0だろ。

「なんですか。」

「冷たーい。あのね、ウチ来ない？」

…。この人何企んでんだろ？

「じゃ、7時に迎えに行くから。ブチッ」

えー。まだ何も言っていないのに…。

迎えに来るなら断れないな…準備するか。

人間不信

「良い？しっかり聞いてね。」

空気が強張ってる。

「あなた達の親はあなた達が怖くてここに預けたの。きっと戻ってくるって言ってるね。」

すぐには理解が出来なかった。親は生きていた。私たちが…怖い？

私たちは人の考えを当てるという特技を持っている。

これは超能力とかじゃなく、人の思考方法や表情、過去の言葉等色々なことを統計して、ようするに計算で割り出してるだけ。

幼児期からその能力を発揮し、親は私たちから離れていった。

人はそういうものなんだ。

変わってるものはみんな仲間はずれ。

いつかみんな離れていく。

それなら私だって深く関わらない。

『どうせ裏切られるなら傷は小さい方が良い。』

そのときからそんな風に思うようになった。

―その告白の数日後、私たち宛に手紙が届いた。

迎え

ピンポーン

「又柚ー。迎えに来たぞ。」

「え？何で唾遊都？」

「姉貴に頼まれた。ほら、行くぞ。」

「あ、う、うん。今自転車用意するから…」

「良い。乗れ。」

乗れって…後ろに？

「重いから良いよ。」

「姉貴乗ってんだから大丈夫だよ。行くぞ。」

「あ、待って。」

「しっかりつかまれよ。」

真夏の朝。唾遊都の背中にしがみつきながら、風を切り、心地よい風が吹く。

『このままずっといたい。』

不意にそんなことを思った。
恥ずかしさに顔をうつ向けて、先輩の家に向かったのだった。

手紙

—美喜、咂遊都へ

私達はあなた達を捨てました。

もう会うことはないでしょう。

あなた達が読む頃に私達はこの世に存在しないのだから。

あなた達には才能があります。その能力はしっかり発揮してください。

私達は貧乏でした。あなた達を伸ばす程のお金がありませんでした。

私達は考え、考え尽くした上であなた達を捨てる道を選びました。

あなた達がこの手紙を読む頃、あなた達は中学生になっているでしょう。

これからあなた達は我が家に住んでもらいます。

普通に暮らしていただけるくらいのお金は用意しました。

無事、高校、大学へ行って二人で仲良く暮らしてください。

母、父より

…。

何この手紙。遺書…。二人で暮らす？ここを出る？金はある？

才能を伸ばすため？私達の為じゃない。あなた達は逃げた。

みんなみんなわかってない！わかってくれない。もうわからなくて良い。

私は弟だけを信じて生きる。

もう誰も信用しない。

衝撃の告白を聞いた直後だからか、私の頭は混乱していて、この世の全てのものに価値がないような気がした。

先輩の家

「おい、着いたぞ。」

自転車で30分。

先輩の家はマンションの5階だった。

「うわーキレイ。」

そこには海が広がっていた。

「親父達が唯一残したもんかな…。」

「え？」

「ほら、入れよ。」

「又柚ー！久しぶり。元気？」

入った瞬間抱きつかれる。

「先輩、苦しいです。それに昨日終業式です。」

「離してやれって。」

「何よ。二人っきりで来ちゃって。」

さっきの状況を思い出しうつ向く。

「ッ。お前が面倒くさいとか言うからだろ！」

「むきになっちゃってー。」

いつ見ても仲良いと思う。私もこんな家族が良かった。

「さて、さっそく何しようか？」

「決めてなかったんですか？」

「だってね、又柚と会えないなんて耐え…」

「わかりました。じゃあ、強制連行の代わりに勉強教えてくださ
い。」

「あら、そんなのお安いご用よ。唾遊都パス。」

「は？姉貴の方が教えんの上手いだろうが。」

「一年前のことなんか忘れちゃったわ。それ終わったらお昼一緒に作りましょうね、又柚。じゃ、私部屋にいるからなんかあったら呼んで。」

「…。」

美喜先輩自分が呼んだくせに…。

「じゃ、宿題。教えて。」

「しょーがねーな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1575z/>

MI ッ K I ー

2012年1月14日22時56分発行